

ここが、世界の掃き溜め

This is the world's rubbish heap



FOOLISH PIGGIES FILMS PRESENTS

そして

And
the Mud Ship
Sails Away...

泥船

はゆく

A FILM BY HIROBUMI WATANABE

WITH KIYOHICO SHIBUKAWA

AND AYASA TAKAHASHI KAORU IIDA MISAO HIRAYAMA

PRODUCER/HIROBUMI WATANABE YUJI WATANABE

DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY/WOOHYUN BANG

EDITOR-SOUND RECORDIST/TERUHAYA NAGATOMO

MUSIC/YUJI WATANABE

WRITER-DIRECTOR/HIROBUMI WATANABE

- 第26回東京国際映画祭 正式出品
- フィンランド/ヘルシンキ・シネアジア映画祭正式出品
- ドイツ/第14回ニッポンコネクション正式出品
- イギリス/レインダンス映画祭正式出品
- オランダ/カメラジャパンフェスティバル正式出品
- スコットランド/アバディーン映画祭正式出品

世界が絶賛、罵倒、大爆笑。その面白さ<破格>

<物語>

栃木県大田原市で祖母とふたりで暮らす
無職、無気力の男、平山隆志。
怠惰な自分の生活を変える力も、
変える気も無いまま日々を浪費する彼のもとへ、
ある日、死んだ父の娘だというひとりの少女が訪ねてくる――。

<作品紹介>

「そして泥船はゆく」は栃木県大田原市出身の映画監督・渡辺紘文、
映画音楽家・渡辺雄司兄弟が旗揚げした映画製作集団大田原愚豚舎第一回作品。
超少人数体制、超低予算という過酷な状況の中製作された本作は、
奇跡とまで謳われたアジア最大の映画祭・東京国際映画祭出品を皮切りに、
フィンランド、ドイツ、イギリス、オランダ、スコットランドの海外映画祭に
次々と出品され、各地で絶賛と爆笑と罵倒、大きな反響を呼び起こしてきた。
国内においては自主上映活動を経て、東京・新宿武蔵野館において公開されると、
連日の満席、立ち見が出るほどの盛況となり、その熱狂を帯びた勢いは未だとどまることを知らない。
現代日本一地方社会の中を、白墮落で傍若無人な主人公があくまで自分らしく、
偽悪的に生きてゆく姿をユーモラスかつ哲学的に描き、観る者に“逆説的”に希望やエネルギーを与える本作品。
主演・渡川清彦の熱演、渡辺兄弟の96歳の実祖母・平山ミサオの怪演も見所。
<破格の面白さ>を誇る栃木県産異色喜劇映画「そして泥船はゆく」が遂にその姿を現す――

大田原愚豚舎第一回作品『そして泥船はゆく』
And the Mud Ship Sails Away...

©2013 大田原愚豚舎
88分/ビスタサイズ

キャスト

渡川清彦

高橋綾沙

飯田芳

戸田古道

平山ミサオ

スタッフ

製作・監督・脚本：渡辺紘文

製作・音楽監督：渡辺雄司

撮影監督：バン・ウヒョン

編集・録音：長友照準

【大田原愚豚舎】

大田原市在住の映画監督 渡辺紘文と、

映画音楽家の渡辺雄司兄弟が

2012年に旗揚げした、

大田原市を拠点に活動する映画制作集団。

<http://foolishpiggiesfilms.jimdo.com/>



型破りの映画というものは、
ありそうでじつは滅多にないものである。
特に、それで、あっと驚く作品など、そうそうあるものではない。
ところが私はこの「そして泥船はゆく」には
本当にびっくりしてのけぞった。
なんだこれは。こんなへんでこんな映画が、どうしてこんなに面白いのだ。
驚いた点では
「勝手にしやがれ」くらいかもしれない。

<佐藤忠男 / 映画評論家>

「そして泥船はゆく」は渡辺監督自身を描いた映画だ。
自己愛と自己嫌悪に引き裂かれ、世間の底辺でのたうち回る主人公は何とか
「自己」の外に飛び出そうとヤケソの闘いに挑む。
外へむかおうとするその意思を俺は評価する。
その先は茶の道だけど、だから何だってんだ。
この映画は、映画界に居場所がなく地元に戻った気弱なデブの渡辺が、
再び映画に立ち向かうための必死の叫びであり、宣言なのだ。
居心地のよい自己愛と決別した渡辺が破滅するか成功するか、
皆さんどうか笑って見届けてやって下さい。

<天願大介 / 映画監督>

不思議な映画だ。
共感できる登場人物は一人もない。
状況や感情はセリフで説明され、まるで舞台劇のようだ。
後半はコメディなのに笑えない、感嘆している。
それでも愛おしいのは登場人物すべてが哀しいからだ。

<佐々部清 / 映画監督>

栃木からの痛快な一撃！
モノクロの重喜劇で今の日本のダメさを描く
このダメな八方塞がりの描き方が鮮烈！
初主演の渡川清彦さんも魅力を十二分に発揮

<わたなべりんたろう / 映画監督・ライター>

最後の幻覚シーンの前まではワンシーン・ワンカットを貫き、カメラをほぼ固定した長回しが続くが、
そういう映画にありがちな停滞感が少しもない。
人物たちの止まらない速いテンポの会話や出し抜けのアクションによって、画面が時折鋭いカミソリで切り裂かれる。
風刺と即興のカミソリが引き裂く裂け目から生々しい映画の効果が現れる。
人生の退屈さが鋭い感受性と共にリアルにほどぼろののだ。
主人公の家が茶の間と玄関先だけで処理されているように、他の場所もリフレインされて場面の数は非常に少ない。
限定によって時間と場所の深みを自然に、逆に広く豊かに見せる表現に成功した演出力は確かなものだ。
出突っ張りの渡川清彦の演技がこの映画に大きく貢献していることは間違いない。
不適な立ち振る舞いに可笑しみに溢れた驚くべき細かい身体表現を加えることによって、
怠惰で野方園だが傷つきやすい青年の心理を見事に現出させた。

<柳町光男 / 映画監督>

渡川清彦さんが、なんと魅力的に佇んでいるのでしょうか。
セクシーで、崩れていてだらしない、怠惰で気分屋、小心者。
「危険な男」を演じることが多いこの俳優、これほど見える、かつ魅せる映画はこれが初めて。
もし私が渡川清彦ならば、この作品を宝にします。
物語はあってないようなもの。様々なエピソードの取捨もついていませんが、それでもかまわない。
いやむしろ、取捨つかない方がこの世界には似つかわしい。そんな独特の「ゆるい空気」が全編にながれています。
これは勉強して身につくものではなく、作り手の個性ないし才能だと思います。
これはクリエイターにとって、何よりも代え難い宝のものは、是非、第二作目を拝見したいです。

<皆川ちか / 映画ライター>

ローエン兄弟のジェフリー・リボウスキが再び降臨したかのような。
映画「そして泥船はゆく」は近年の日本のインディーズ映画では最も成功した作品のひとつだと思われる。

<ダリオ・トマーゾ / 映画評論家>

渡辺紘文の創り出した超現実的喜劇映画は、
その無意味さ、あるいは陽気さ、あるいはその双方によって観る者を攻撃するだろう。

<アメリカ・VARIETY 誌>